

# 日本書道史

## 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

住川 英明 (岐阜女子大学)

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 【学習到達目標】

- 書家の書と文人の書のそれぞれの特徴について、説明することができる。
-

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 1. 高村光太郎の書と書論

- 詩人であり、彫刻家であった高村光太郎は、数多くの書作品や肉筆資料（詩稿や書簡など）を遺した。
- その書は、安定した細線による、鋭く力強い情趣に満ちており、造型家らしい巧みな文字造形や紙面構成によって、隙のない調和のとれた作品空間を生み出している。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 1. 高村光太郎の書と書論

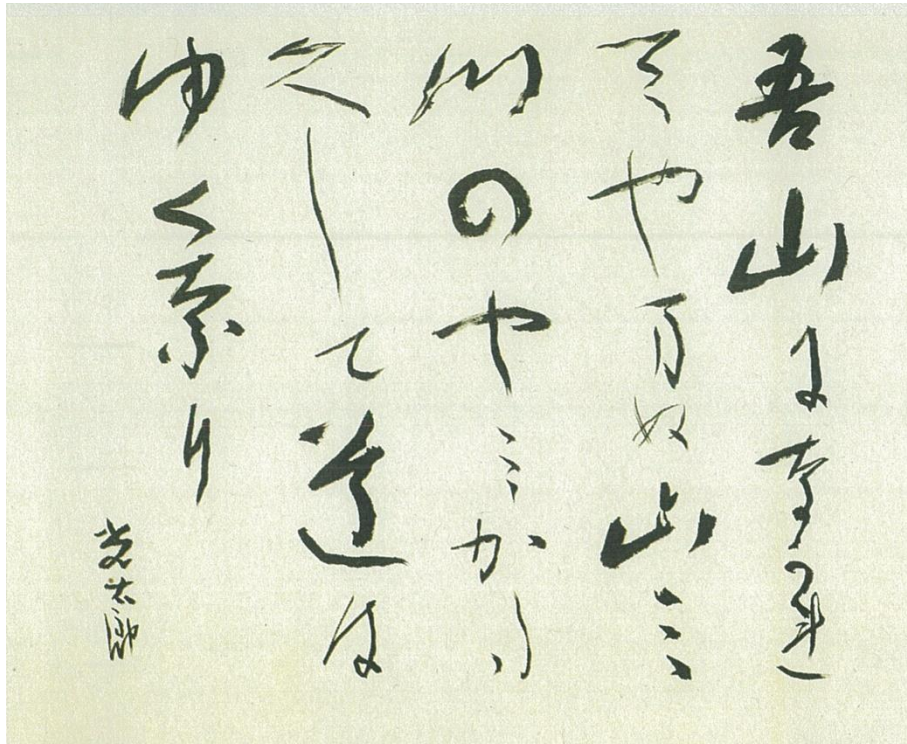
- 人工から起つたものは何処までも人工の道を究めつくすのが本当であり、それには人工累積の美を突破しなければならないのである。
- 書はあたり前と見えるのがよいと思ふ。無理と無駄との無いのがいいと思ふ。力が内にこもつてみて騒がないのがいいと思ふ。
- 書を究めるといふ事は造型意識を養ふことであり、この世の造型美に眼を開くことである。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

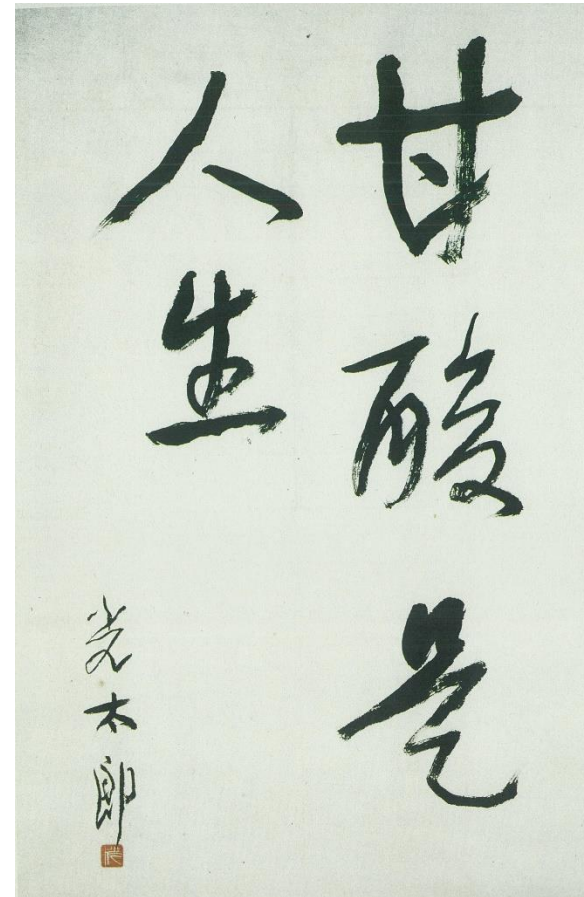
## 1. 高村光太郎の書と書論

- 書は一種の抽象芸術でありながら、その背後にある肉体性がつよく、文字の持つ意味と、純粹造型の芸術性とが、複雑にからみ合つて、不可分のやうにも見え、又全然相関関係がないやうにも見え、不即不離の微妙な味を感じさせる。
- 意味と造型とは、送り手（制作者）と受け手（鑑賞者）にとっての「入口」あるいは「出口」として、浅からぬ関係を持つ。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」



高村光太郎 《吾山に》



高村光太郎 《甘酸是人生》

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 2. 會津八一の書と書論

- 歌人・美術史家であった會津八一は、書の造詣が深く、その作品は漢字の書・仮名の書・漢字仮名交じりの書や篆刻など多岐にわたっている。
- 彼は、書写された文字の造形を印刷された文字（明朝体）の造形との関係性で捉えながら、その「明瞭性」ということを強調している。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書」

## 2. 會津八一の書と書論

- 一定の面積を同じ太さの線で分布して行くといふことが、これが書道で一番大切なことであつて、若し書道といふことが、自分の考えを出来るだけ明瞭に相手に伝えるといふ点に、文化史的に、民族の生活史的の意味においてそれが一番大切であるならばこれを重視すべきである。



# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 2. 會津八一の書と書論

- 會津八一は、当時の書壇が漢字作家と仮名作家とに二分され、両方の作家がそれぞれの領分を侵さない制作を続けていることへの違和感を率直に表明した。
- 彼は、日本人が現代日本語の言語表記に則して書作品を制作し、発表すべきだと主張した。

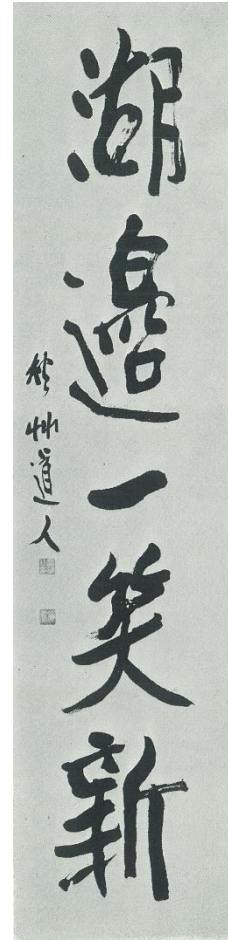
# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 2. 會津八一の書と書論

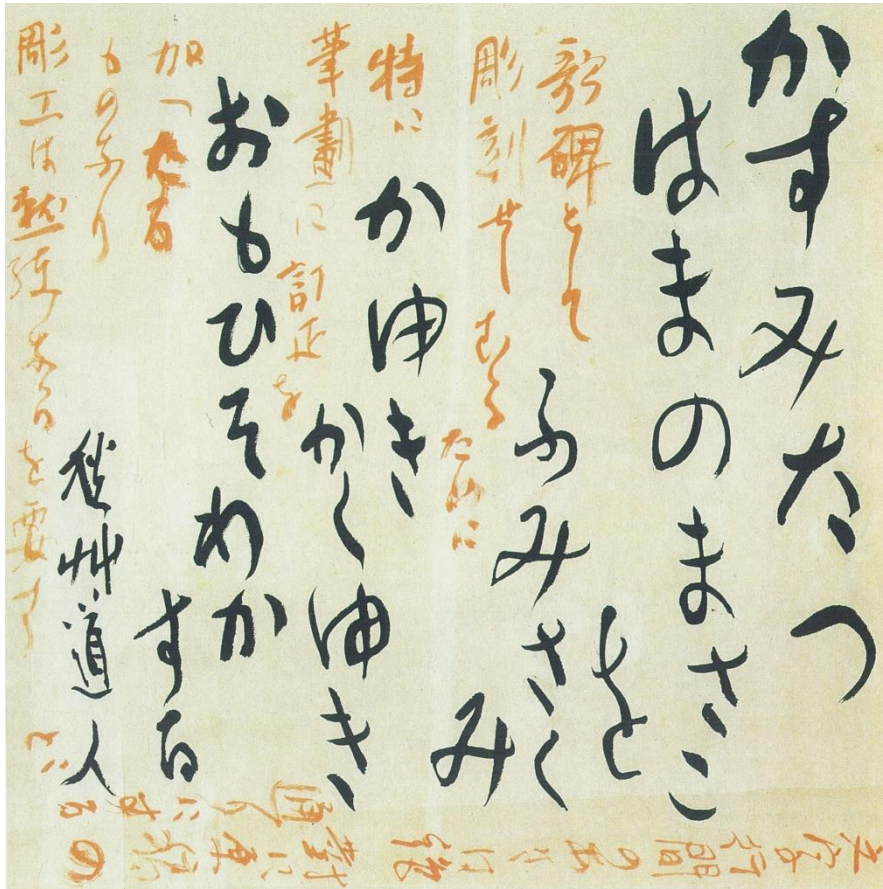
- われわれ日本人が現在の生活で、現在われわれの営んである生活では、仮名と漢字を交へた文章を手紙ともするし、新聞の記事や、広告ともしてある。
- 私などの痛切に考へるのは、両方の書道（※仮名書道と漢字書道）を、一人で兼ねるやうな書道を持つことは非常に重要だ。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書」

會津八一 《林下十年夢 湖辺一笑新》



會津八一 《かすみたつ》



# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書」

## 3. 書家の書と文人の書

- 知識人の文人趣味は、明治・大正時代までは社会的に珍しくなかったが、昭和時代に入ると衰退の一途をたどり、戦後ともなれば、むしろまれで特異な事象となってしまった。
- 書壇を構成する書き手たちは、自己の言語生活とは異なったところで作品の題材を選択するようになり、書の表現とその結果としての風趣が、題材（言語）と離れたところで成立するケースが多くなった。

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 3. 書家の書と文人の書

- 書というものは、その書き手の学問、芸術、思想を托するものとして緊張を生み出すものである。伝達のメディアが伝達すべきものから遊離したり、孤立したりすると、メディアは生命を喪ってしまうと私は考えている。
- 書が本来の生彩をもつためには、書と書の担い手が時世に適った学芸、思想を裡にたくわえることが必要である。（宮川寅雄「近代知識人の書」）

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 3. 書家の書と文人の書

- もとより書は内的と外的との要素がより合わさって十分な表現となりうる。歴史に残る名蹟が素晴らしいのは、写経ならそこにこめられた写経僧のいちずな信仰心が、明清の書ならその背後にある文人たちの生活と教養とが、書の技術と美しく結ばれているからである。（菅原教夫「書と心」）

# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書」

## 3. 書家の書と文人の書

- 一部の文人の書が、突出した「うまさ」を備えているのは、書者が書こうとする内容（意味）に対して、深い理解を有しているからである。そして書かれた形式（造型）には、体験の積み重ねからくる精神の深さが「漂い出る」のであり、誰よりも書者自身が、その漂い出るものの価値をよく承知しているからである。

# 課題

1. 書芸術が、書家の書と文人の書に分離している現状を踏まえて、私たちはどのような立場で制作に向き合ったらよいのだろうか。討議してみよう。



# 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

## 【学習到達目標】

- 書家の書と文人の書のそれぞれの特徴について、説明することができる。

# 日本書道史

## 第15講 「まとめ 一書家の書と文人の書一」

住川 英明 (岐阜女子大学)